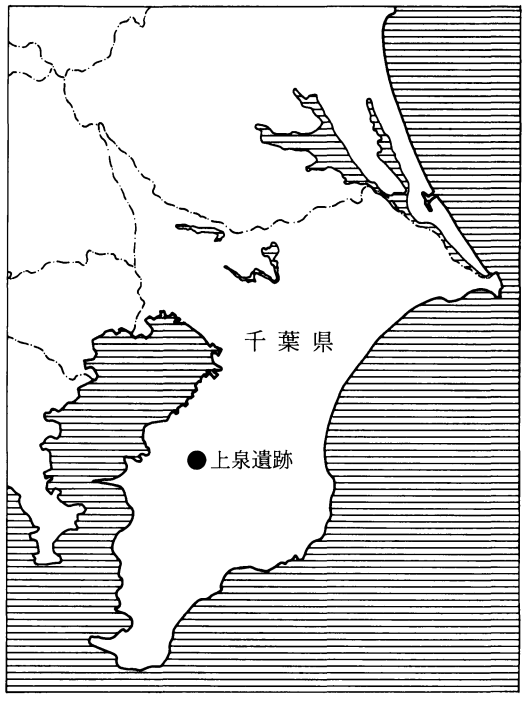
袖ケ浦市上泉遺跡

―― 二級河川松川広域一般河川改修事業埋蔵文化財調査報告書 ――



平成11年3月

千　葉　県　土　木　部

財団法人　千葉県文化財センター

序　文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第374集として、千葉県土木部の二級河川松川広域一般河川改修事業に伴って実施した袖ケ浦市上泉遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代から近世にわたる遺物が出土し、松川流域の各時代の様相を裏付ける上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また文化財の保護普及のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成11年３月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長　　中　村　　好　成

目　次

I　はじめに……2
　1　調査の経緯と方法……2
　2　遺跡の位置と環境……5
　（1）遺跡周辺の地理的環境……5
　（2）遺跡周辺の歴史的環境……5
II　検出した遺構と遺物……7
　1　調査成果の概要……7
　2　遺構と遺物……7
　（1）基本層序……7
　（2）1号流路・2号流路……7
　（3）遺物……9
III　まとめ……11
報告書抄録

挿図・図版目次

第1図　周辺の遺跡分布図……3
第2図　上泉遺跡周辺地形図……4
第3図　調査区平面図・土層断面図……8
第4図　自然流路平面図・土層断面図……10
第5図　出土遺物実測図……12
図版1　上泉遺跡と周辺の地形
図版2　1．調査区全景　2．調査区西側遠景
　　3．1号流路・2号流路
図版3　1．1号流路断面
　　2．遺物出土状況
　　3．出土遺物

凡　例

1　本書は千葉県土木部による二級河川松川広域一般河川改修事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県袖ケ浦市下泉444ほかに所在する上泉遺跡（遺跡コード　229-007）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査及び整理作業は、調査部長　沼澤　豊、南部調査事務所長　高田　博の指導のもと、主任技師　渡邉昭宏が、下記の期間に実施した。

　　発掘調査　　平成11年1月6日～1月29日
　　整理作業　　平成11年2月1日～2月25日

5　本書の執筆は、主任技師　渡邉昭宏が担当した。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

　第1図　国土地理院発行　1/25,000地形図「上総横田」（NI-54-19-16-3）

　第2図　袖ケ浦市役所発行　1/2,500都市計画図を改図転載

8　周辺航空写真は、京葉測量株式会社による平成10年に撮影のものを使用した。

9　本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

10　本書で呼称した遺構番号は、調査時の番号と異なる。

Ⅰ はじめに

1　調査の経緯と方法（第１・２図）

小櫃川の支流である松川は、川幅が狭く曲流しているため、大雨のたびに氾濫し、周辺に多くの被害をもたらしてきた。千葉県土木部は、河川災害復旧助成事業として松川の本格的な改修を計画し、今回調査した上泉遺跡（１）より下流部分については、既に工事を終えている。その工事に先立ち、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を２か所で実施している。今回調査した上泉遺跡から約300m下流の上泉遺跡（２）は平成元年度に実施し、さらに300mほど下流にある永地遺跡（３）については昭和62年度に実施している。千葉県土木部は、引き続き松川の改修を進めるために、広域一般河川改修事業として工事区域内の埋蔵文化財の有無と取扱いについて関係諸機関と協議した。その結果、事業計画の変更は困難なため、記録保存の措置を講ずることとなり、平成11年１月に財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施した。

今回調査した遺跡は「上泉遺跡」という名称であるが、既に同名の遺跡名で２か所が調査され報告書も刊行されている。前述した松川河川災害復旧事業として平成元年度に実施した上泉遺跡（２）と、松川左岸の台地上に位置し、一般県道横田停車場上泉線の道路改良事業として平成２・３年度に実施した上泉遺跡（６）である。本報告書においては、混同を避けるためにこれら同名の３遺跡について次のような略称を用いることにする。

今回調査した（平成10年度）上泉遺跡　→　本遺跡
平成元年度調査の上泉遺跡　→　上泉遺跡（低地）
平成２・３年度調査の上泉遺跡　→　上泉遺跡（台地）

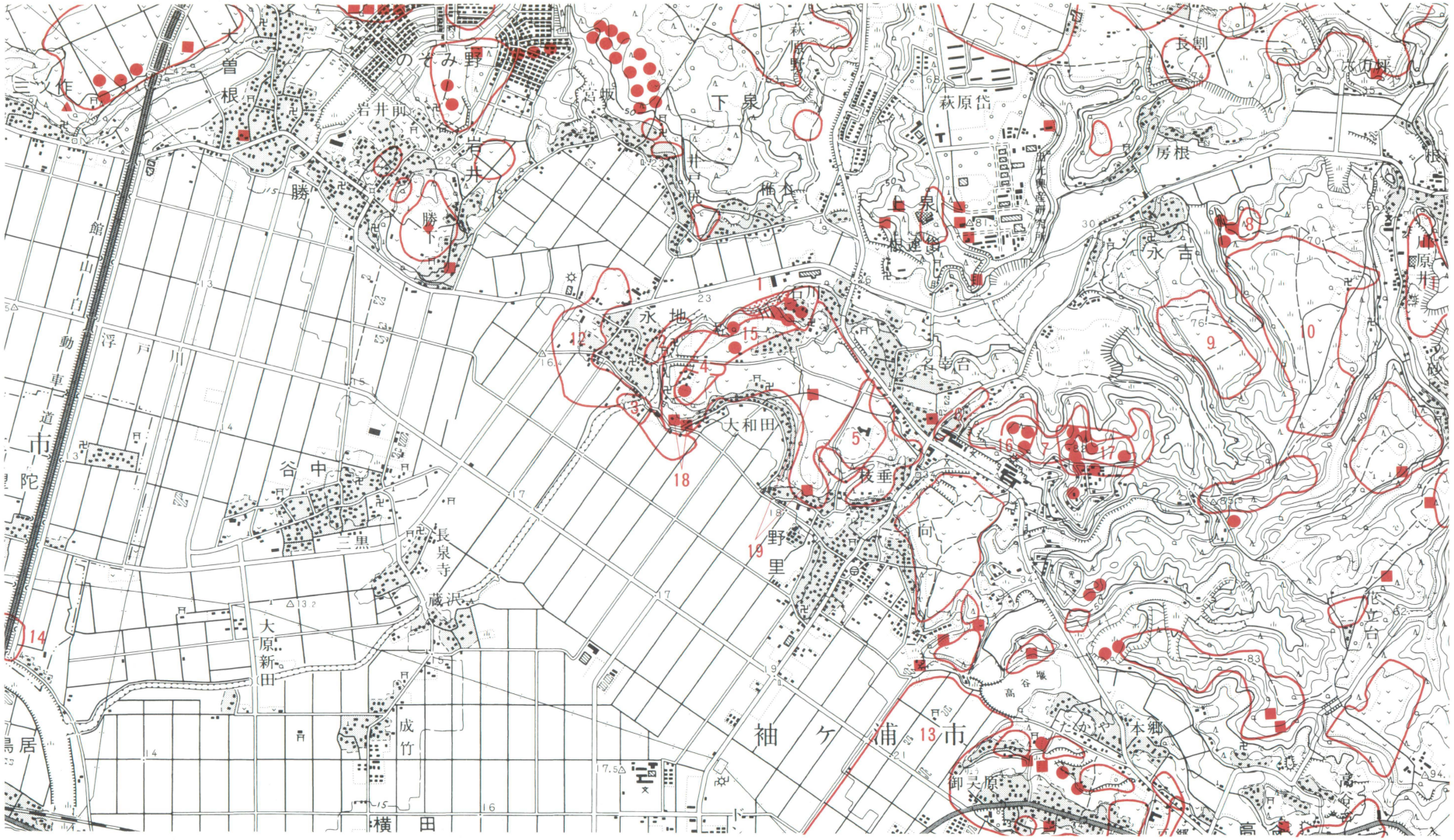
なお、「千葉県埋蔵文化財分布地図（３）」[1]には、本遺跡南側の台地平坦部を広範囲に「上泉遺跡」という名称で周知の遺跡として記載されているが、既にこの範囲内において数か所の調査例があり、それらについては「上泉遺跡」という名称は用いられていない。

調査区の現況は水田である。まず、上層確認調査のため調査対象面積3,900m²の約５％の面積で、任意にトレンチを設定した。バックホーによる表土除去ののち、遺構の検出作業に移った。１・２トレンチ（以下１Ｔ・２Ｔと表記する）において自然流路が検出された。他のトレンチでは遺構は確認できなかったので、自然流路の範囲を確認するため１Ｔ・２Ｔの拡張を行い、556m²の上層確認調査のみで本遺跡の調査を終了した。

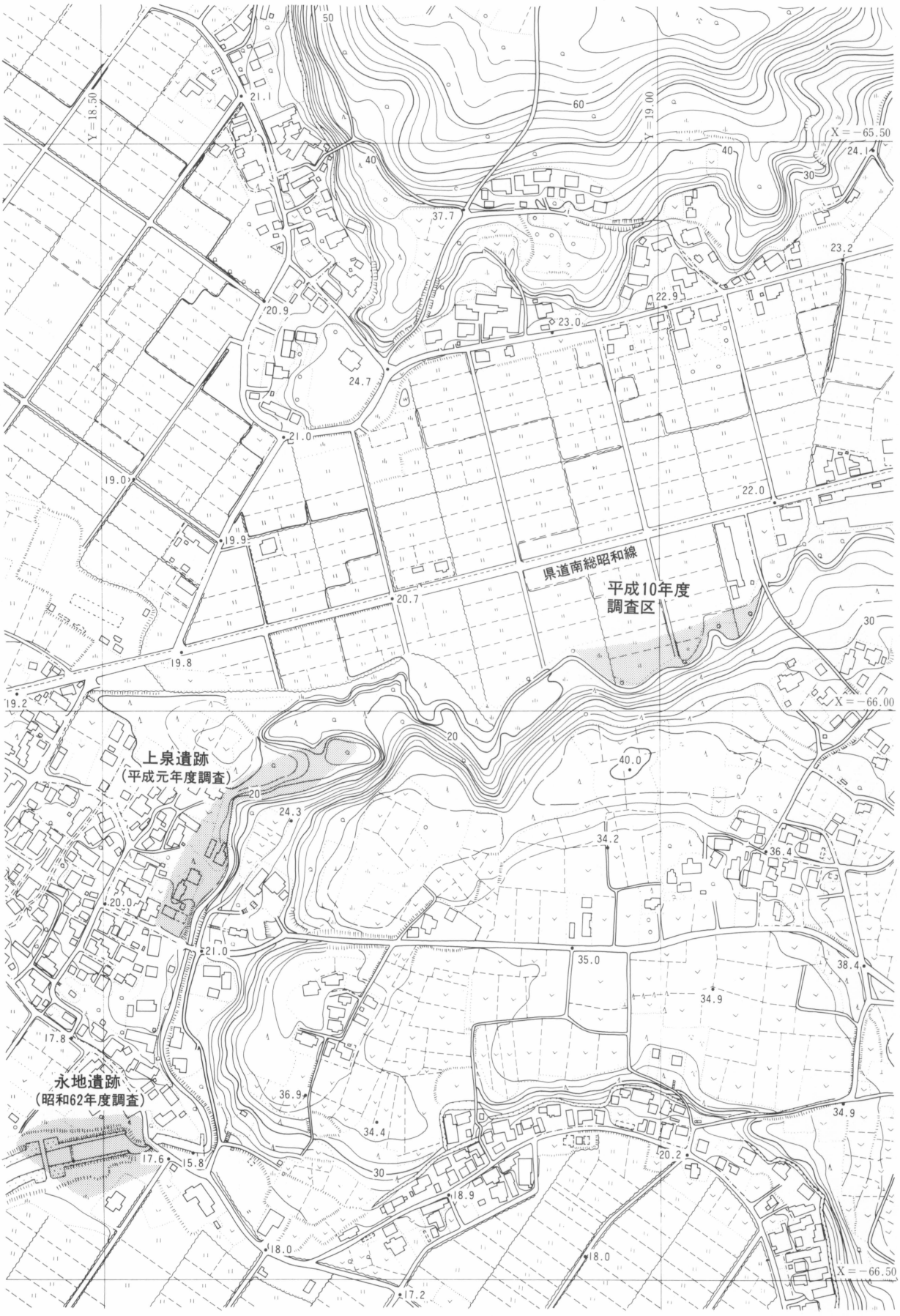
発掘区の設定は国家座標を基準として、第３図のように設定した。各々の小グリッドは、A1-00、B2-50、C3-55などと呼称した。

本報告書で記載した遺構番号は、調査時の番号と異なるので以下に示す。なおトレンチ番号は調査時に使用したものと同一である。また、SD-2･SD-3は欠番である。

ＳＤ－１（調査時番号）　→　現代の暗渠溝と判明したので遺構としない
ＳＤ－４（　〃　）　→　１号流路（報告書記載番号）
ＳＤ－５（　〃　）　→　２号流路（　〃　）



第１図　周辺の遺跡分布図（国土地理院発行1/25,000地形図）



第２図　上泉遺跡周辺地形図（1/5,000）

2　遺跡の位置と環境

（1）遺跡周辺の地理的環境（第1・2図、図版1）

千葉県袖ケ浦市は、房総半島中央部の東京湾岸に位置している。市の北東部には小櫃川と養老川との間に形成された袖ケ浦台地[2]があり、市の中央部には、小櫃川によって形成された広大な沖積平野（小櫃川低地）が広がっており、肥沃な土地を利用して水田が営まれている。小櫃川は清澄山系に源を発し、丘陵地を北流し、袖ケ浦市横田付近で流路を大きく西へ転換して東京湾に注ぐ。この小櫃川の支流に松川がある。松川は市原市との境付近に源を発し、袖ケ浦台地を樹枝状に開析しながら低地へと流れ、小櫃川が大きく流路を変える横田付近で合流する。本遺跡は、この松川中流域の右岸に接する。かつて松川は、本遺跡あたりから曲流を激しくして小櫃川低地を流れていたが、本遺跡より下流の袖ケ浦市永地付近では災害復旧事業により改修され、流路拡張等で直線的になっている。よって現在の松川中流域においては、本遺跡周辺が最も曲流の激しい場所となっている。本遺跡の南側（松川の左岸）には、台地部への急峻な崖面が見える。本遺跡周辺の標高が約20m、南側の台地平坦部が約40m、比高差約20mの崖面である。特に本遺跡中央部には、松川の氾濫の影響か、蛇行の激しい3か所で、土砂崩れのため地肌がむき出しになっている部分がある。

（2）遺跡周辺の歴史的環境（第1図）

本遺跡南側の台地上は、平坦面が広がり人々の暮らしには格好の場所である。立川ローム層の良好な堆積も確認され[3]、旧石器時代から人々の生活痕跡が認められている。旧石器時代の調査例としては、上泉遺跡(台地)や文脇遺跡（5）[4]があり、立川ローム層中に数か所の石器集中地点が検出されている。

縄文時代は、文脇遺跡で前期住居跡が4軒確認されたほかは、早期の陥穴がわずかに検出されているのみで、この台地上では報告例が希薄である。松川の上流部を見ると、小谷遺跡（8）[5]で早期の炉穴等がわずかに検出されている。さらに上流の仲ノ台遺跡[6]においては「千葉県埋蔵文化財分布地図（3）」に後期（加曽利B期）の包蔵地と記載されているが、調査例はない。

弥生時代中期に入ると南側台地上は徐々に活況を呈し、後期に至っては人々の生活痕跡が最も高密度に検出されるようになる。この台地の先端部にある上ノ山遺跡（4）[7]では、中期（宮ノ台式期）の方形周溝墓が検出され、この時期の墓域と考えられる。この墓域と呼応する集落はこの台地上には検出例がなく、この台地先端部から見下ろす低地にある西原遺跡（12）[8]に存在するようである。ここでは中期（宮ノ台式期）の環濠集落が確認されている。文脇遺跡では、中期住居跡はないが後期の300軒を越える住居跡が確認されている。上泉遺跡（台地）や寒沢遺跡（7）[9]でも同時期の住居跡が検出されており、大集落の存在を窺わせる。

文脇遺跡や上泉遺跡（台地）で報告されている弥生時代後期の大集落は、古墳時代前期へと存続していくようである。弥生時代中期の墓域となっていた上ノ山遺跡周辺の台地縁辺部は、古墳時代に入ると上泉古墳群（15）となる。この古墳群中最大規模の上ノ山古墳は確認調査例[10]があり、中期以降の築造であることが確認されている。さらに、松川を上流に遡ると南側台地の続きに寒沢古墳群（17）や愛宕古墳群（16）[9]がある。いずれも前期からの古墳で、周辺に当該期の集落の存在が確認されている。ところが、南側台地上では後期になると、ほとんど検出例がなくなる。文脇遺跡を中心とした大集落もこの時期には断絶し、奈良・平安時代に再び集落が営まれるようになる。

奈良・平安時代の遺跡で特に注目すべきものは、遠寺原遺跡（9）と永吉台遺跡（10）[11]である。共に松

川上流域の左岸台地上に位置し、単なる集落跡だけでなく、集落内寺院や土器製作遺構が検出されている。さらに上流には東郷台遺跡[12]があり、川原井廃寺が調査されている。

文脇遺跡を中心とした集落は、中世前半まで続くようである。同時期の集落は、小櫃川沿いの沖積低地にある芝野遺跡（14）[13]でも確認されている。中世後期になると城郭が盛んに造られるようになるが、松川上流の丘陵地においても同様で、川原井里見城跡[14]や川原井城跡（15）が存在する。ところが集落の報告例はほとんどない。文脇や芝野の各遺跡の集落も消滅するようである。この時期からの集落は、近世から続く農村集落と重なって立地しているだろう[15]とする見解がある。また、本遺跡周辺の台地上には、文脇塚群（18）や十二天塚群（19）などの中近世の塚の分布が際だっている。

以上、台地上を中心に周辺遺跡を概観したが、本遺跡と同じような沖積低地に立地する遺跡の調査例をまとめてみる。西原遺跡では、弥生時代中期の環濠集落の存在が確認されていることは前述したが、さらに現在の集落周辺を中心に古墳時代前期と後期の集落の存在も予想される。続く奈良・平安時代においても、住居跡こそ確認されていないが、多くの当該期の遺物を検出しており集落の存在を予感させる。沖積低地微高地上の住居跡の検出例は三箇遺跡群（13）[16]でも報告されている。芝野遺跡では、弥生時代後期からの水田跡[17]が検出され、集落を営んできた人々の生産基盤の様相も徐々に判明しつつある。

注1　㈶千葉県文化財センター　1986　『千葉県埋蔵文化財分布地図（3）－市原市・君津・長生地区－』
2　袖ケ浦市　1885　『袖ケ浦町史　通史編　上巻』で用いられている呼称である。
3　鈴木定明・加藤正信・四柳　隆　1993　『袖ケ浦市上泉遺跡』　㈶千葉県文化財センター
4　㈶君津郡市文化財センターと当センターの調査例がある。本報告書では両者の調査例を合わせて引用する。
山本哲也　1992　『文脇遺跡』　㈶君津郡市文化財センター
加藤正信　1995　『袖ケ浦市文脇遺跡』　㈶千葉県文化財センター
5　大崎紀子　1985　『小谷遺跡』　㈶君津郡市文化財センター
6　第1図中№8の小谷遺跡から、松川を約1.5km北東方向に遡った台地上に位置する。
7　中能　隆　1998　『上泉遺跡群上ノ山遺跡』　㈶君津郡市文化財センター
8　㈶君津郡市文化財センター　1998　「西原遺跡」『㈶君津郡市文化財センター年報№15　平成8年度』
㈶君津郡市文化財センター　1998　『掘った見つけたみんなのふるさと　第5回遺跡発表会資料』
9　稲葉理恵　1996　『寒沢古墳群・愛宕古墳群・寒沢遺跡・上用瀬遺跡』　㈶君津郡市文化財センター
10　能城秀喜　1989　「上ノ山古墳」『昭和63年度袖ケ浦町内遺跡群発掘調査報告書』　袖ケ浦町教育委員会
11　豊巻幸正　1985　『永吉台遺跡群』　㈶君津郡市文化財センター
12　光江　章　1985　『東郷台遺跡（川原井廃寺）』　㈶君津郡市文化財センター
第1図中№10永吉台遺跡から、北東へ約2.5km先の松川最上流部に位置する。
13　笹生　衛・神野　信　1992　「芝野遺跡の概要」『研究連絡誌』第37号　㈶千葉県文化財センター
14　第1図中№15川原井城跡から、約1km北東方向へ松川を遡った台地上に位置する。
15　笹生　衛・柴田龍司　1992　「小櫃川流域における中世遺跡の変遷」『研究連絡誌』第37号　㈶千葉県文化財センター
16　光江　章　1985～1989　『三箇遺跡群Ⅰ～Ⅵ』　㈶君津郡市文化財センター
17　神野　信・加藤修司・沖松信隆　1991「木更津市芝野遺跡における水田跡について」『研究連絡誌』第34号　㈶千葉県文化財センター

II　検出した遺構と遺物

1　調査成果の概要（第３図）

確認調査の結果、人為的な遺構は検出されなかった。しかし、松川の旧河道と思われる自然流路を２条確認した。遺物総数は187点であるが、ほとんどが小片で磨滅が激しく、図示できるものはわずかであった。１Ｔ・２Ｔでの検出が最も多く、169点であった。自然流路内の遺物は、すべて周辺や上流からの流れ込みによるものと思われる。

2　遺構と遺物

（１）基本層序（第３・４図）

調査区のほぼ全域にわたり、河川の氾濫による堆積砂か、旧河道への埋土で構成されている。場所により堆積の仕方も異なるが、おおむね第３図のようにまとめられる。

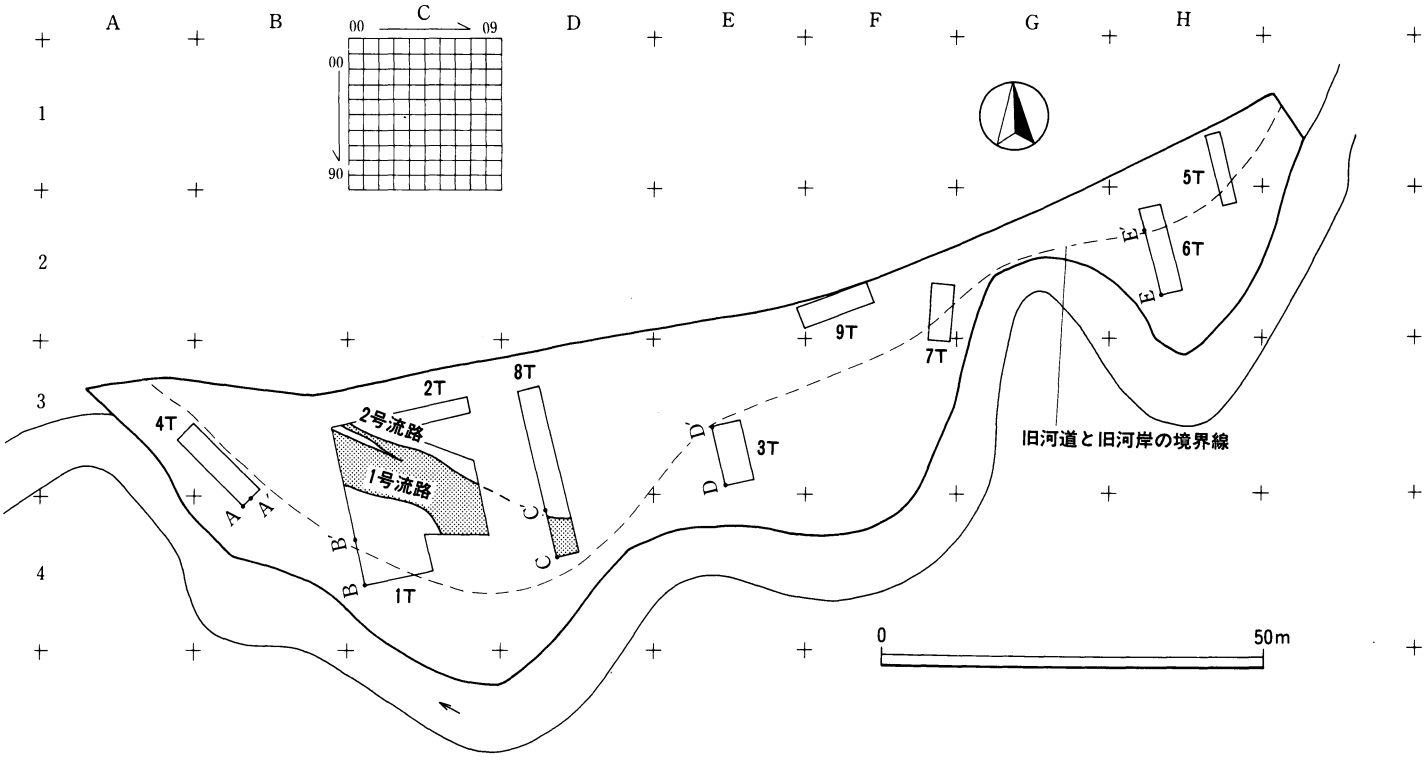
各トレンチの土層断面を観察することで、自然流路と思われる埋土、Ⅳ・Ⅵ・Ⅸ層の３層を確認した。区別するために便宜上、それぞれ順に（Ｃ）・（Ｂ）・（Ａ）とした。新旧関係は（Ａ）が最も古く、次いで（Ｂ）（Ｃ）の順と思われる。このうち面的に確認できたのは（Ａ）のみで、詳細は１号流路として後述する。（Ｂ）（Ｃ）ともに、現河川の方に向かって落ち込むプランが認められ、（Ｂ）では埋土が現河川方向に流れ込むような堆積を見せている。（Ｃ）は（Ｂ）の層とは異なり、ある短い期間に一気に土が堆積した状況が窺える。（Ｃ）については、幾つかのトレンチで旧河岸からの落込みラインが土層断面で確認できたので、旧河道跡として、第３図のように推定線を引いてみた。この線と明治15年陸軍部迅速測図に記されている河道が、ある程度重なるようである。

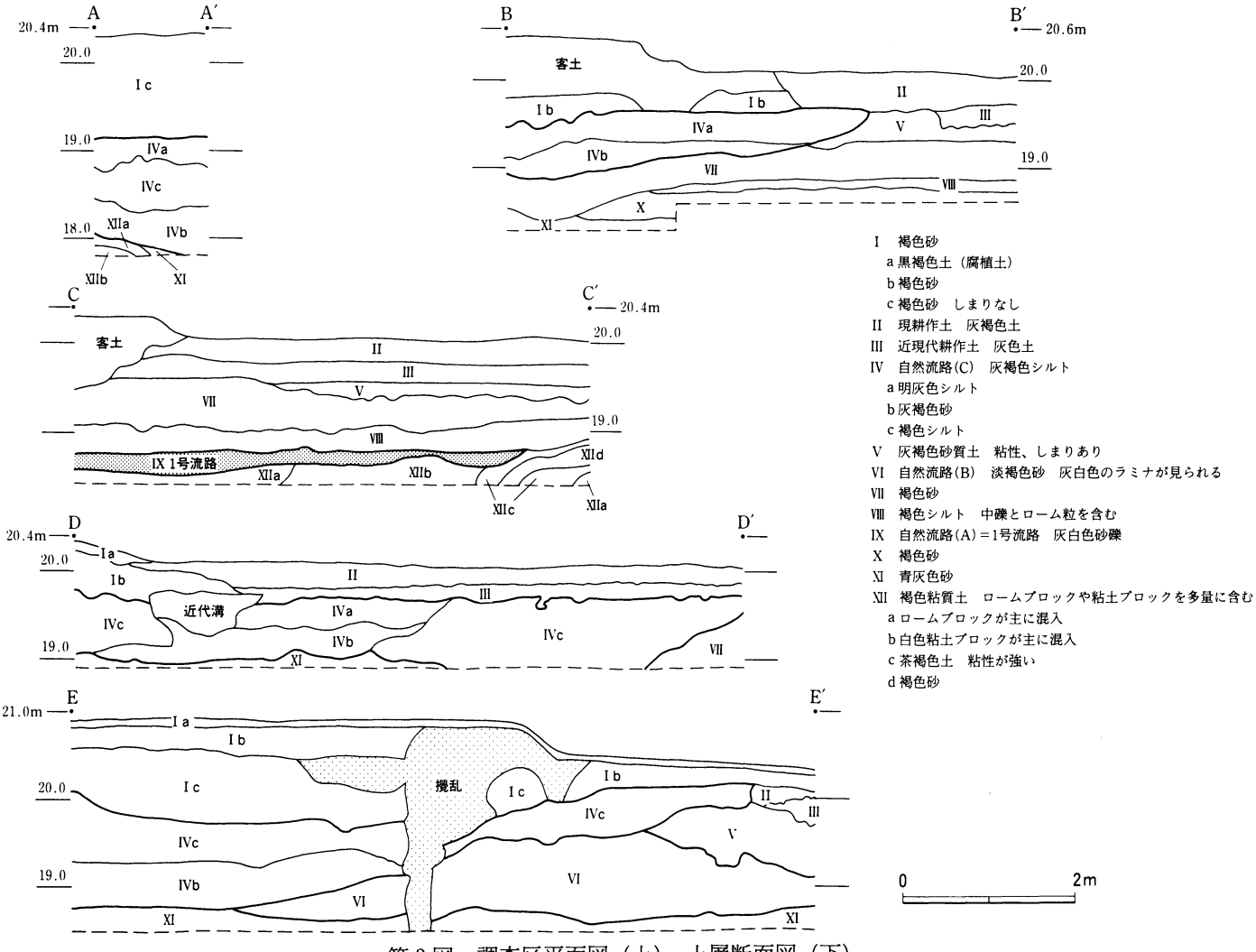
Ⅰ・Ⅴ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅹの各層は、河川氾濫による堆積層と考えられる。これらのうちⅤ層は、５cm～10cmの間隔で複数層が水平に堆積しており、他の氾濫層よりもしまっている。Ⅷ層は、中礫とローム粒を含み、Ⅴ層よりも粘性がある。１号流路の直上の層で、１号流路の埋土と密接な関係があるものと思われる。Ⅺ層は、場所によっては砂層と粘質土層が互層をなすところもある。Ⅻ層は、４Ｔ・８Ｔのみで検出された。上位の層とは明らかに不整合面をなす。直径20cmを超す大きなロームブロックや粘土ブロックが大量に混じる。この層は、調査区南側台地の土層が何らかの原因で崩れ落ちた可能性が高い。８Ｔあたりの台地崖面は、急峻な斜面になっており土砂崩れを起こしたように地肌が露出している。

（２）１号・２号流路（第４図、図版２・３）

１Ｔ・２Ｔで検出された１号流路は、おおむね幅5.5m～7.0m、深さ0.4m～0.5mを測る。２号流路は、幅1.0m～1.5m、深さ0.2mである。自然流路としては掘込みが浅く、扁平な断面形をしている。

１号・２号流路の埋土は、１層とその直上のⅧ層が近似している以外は、流路外の土層と明らかに異なっている。埋土の特徴は礫を多く含むということである。１号流路の北側の立上がりは明瞭に確認でき、２号流路との区別も容易に判断できた。しかし南側の上端線は、Ⅷ層と１層が近似しているために不明瞭であったが、下端からの２・３層の礫層を追求することで確認した。断面Ｃ－Ｃ′の辺りまで２・３層が確認できたが、さらに東側については礫層である２・３層が消滅するため下端が確認できなかった。１Ｔ以





I　褐色砂
　a 黒褐色土（腐植土）
　b 褐色砂
　c 褐色砂　しまりなし
II　現耕作土　灰褐色土
III　近現代耕作土　灰色土
IV　自然流路(C)　灰褐色シルト
　a 明灰色シルト
　b 灰褐色砂
　c 褐色シルト
V　灰褐色砂質土　粘性、しまりあり
VI　自然流路(B)　淡褐色砂　灰白色のラミナが見られる
VII　褐色砂
VIII　褐色シルト　中礫とローム粒を含む
IX　自然流路(A)＝1号流路　灰白色砂礫
X　褐色砂
XI　青灰色砂
XII　褐色粘質土　ロームブロックや粘土ブロックを多量に含む
　a ロームブロックが主に混入
　b 白色粘土ブロックが主に混入
　c 茶褐色土　粘性が強い
　d 褐色砂

第3図　調査区平面図（上）・土層断面図（下）
(1/1,000)　　(1/80)

外の１号流路の方向は、８Ｔの土層断面で再び礫層が確認でき、３Ｔでは確認できなかったため、現松川に続くものと思われる。１Ｔから西方向の流路の行方は、４Ｔで１号流路の埋土を確認できなかったため、北西方向に延びていくものと思われる。２号流路は、検出面で判断する限り１Ｔ中央部分で１号流路から分流している。ただし、１号流路との分岐付近は、現代の暗渠排水溝（スクリーントーン部分）が深く入り込んでいるため明瞭には確認できなかったが、Ｃ－Ｃ′で看取できるので、第４図のようになると想定できる。

遺物は、Ⅷ層中から少しずつ出土しはじめ、礫の混入が増えるにしたがって出土量も増えた。流路の埋土中では１・３層からの出土がほとんどで、２層からも若干検出された。1′層からの出土も数点で、４層からは全く検出されなかった。埋土に関しては、遺物は礫を含む層に混入し、礫を含まない層は無遺物層という明瞭な傾向が窺えた。このことから遺物出土分布状況を見ると、３層を中心とした礫層の広がりが、面的に看取できる。礫は流路の中位に堆積するとは考えられないので、１号流路はある時期、河川の河床であったことが窺える。１号流路の埋土の下層Ⅺ層中からは、第５図２の遺物が出土している。当初この層は無遺物層と考えていたが、遺物の出土で新たな可能性がでてきたため、さらに掘り下げたが、徐々に湧水が激しくなってきたので調査を断念した。遺物は検出できなかったが、１号流路以前の流路がさらに下位にあることも想定できる。

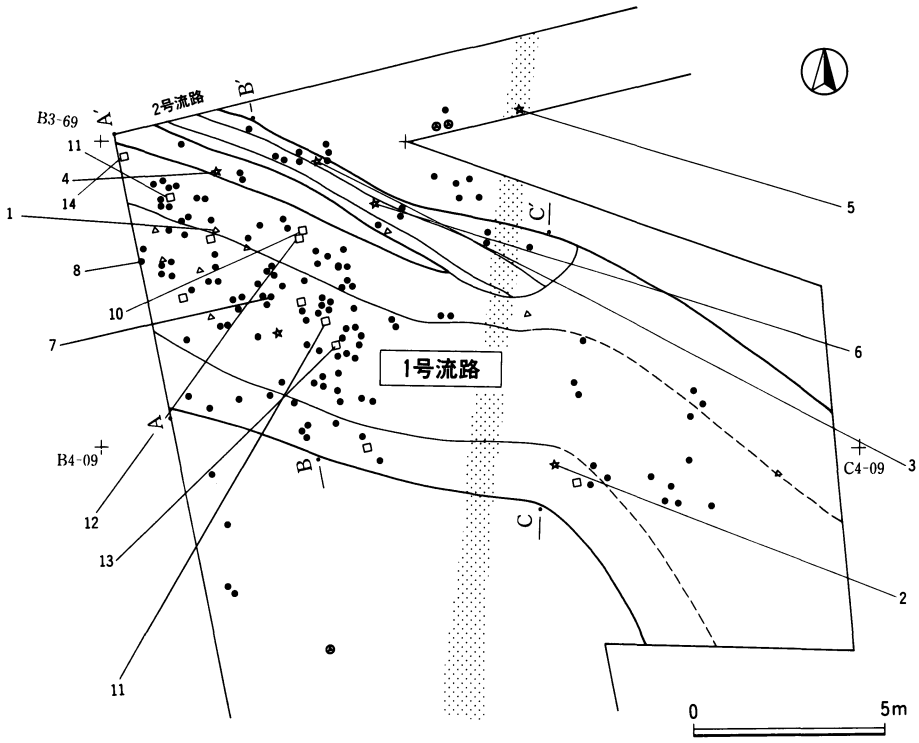
１号流路内には縄文時代から中世までの遺物が混入しているが、その大半は古墳時代から奈良・平安時代の土師器片である。最も新しい時期の遺物は中世である（第５図10～13）。10～12は１層中、13は３層の礫層中から検出されている。１層と近似しているⅧ層中から中世後期の14も検出されている。３層は礫主体でしまりがなく１層と３層の境にある遺物は、下に沈み込んでいる可能性もある。

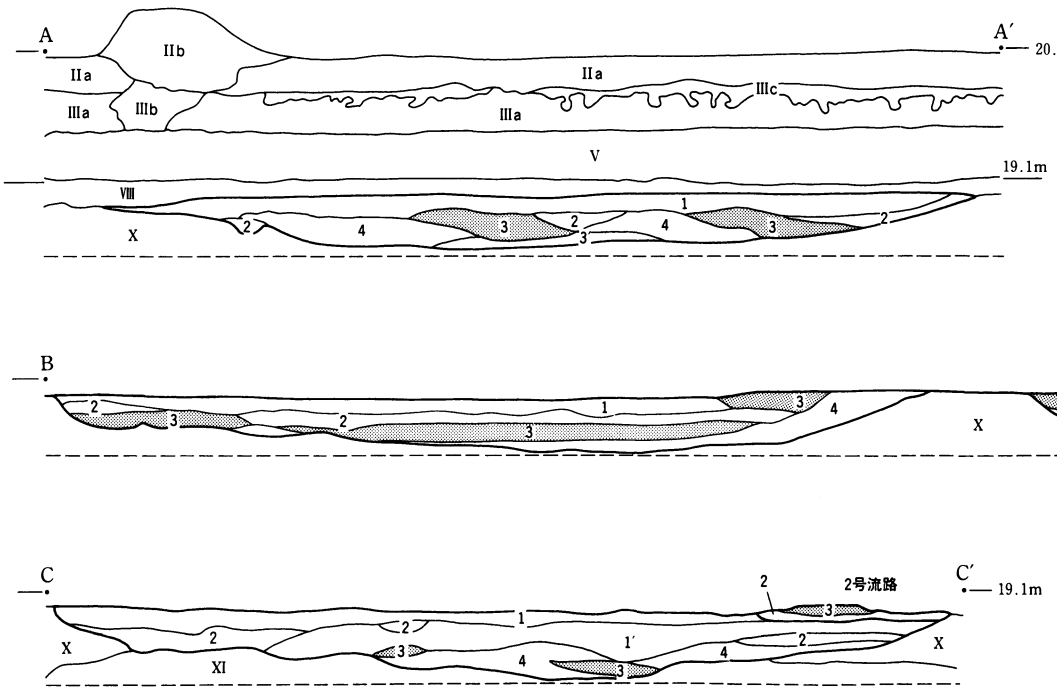
以上のような事実から、１号・２号流路は主として古墳時代から奈良・平安時代に河川として機能していたと考えられる。また、１号・２号流路ともに本流ではなく、氾濫時にできた三日月湖のような状態も想定できる。

（３）遺物（第５図、図版３）

１・３・６～８・10～13は、１号・２号流路の埋土中から出土したものである。２・４・５・９・14～20は、１号・２号流路以外のトレンチ内の出土である。

１は縄文時代後期中葉加曽利Ｂ式期の紐線文土器である。胴部上端のくびれ部の破片で、紐線文と条線が施されている。２～６は弥生土器である。２は中期後葉宮ノ台式期の壺の底部である。1/2ほど遺存し、推定底径は8.0cmとなる。２以外は後期に比定される。３は壺の底部の破片で、推定底径は6.6cmとなる。４は壺の口縁部の破片で、外面と口唇部に細かい縄文が斜めに施されている。５は壺の頸部の破片である。外面はヘラナデによる調整を行っており、刺突のある円形浮文が貼り付けられている。内面は赤彩が施されている。胎土に赤色スコリア粒子をわずかに含む。６は甕の口縁部の破片で、胎土に赤色スコリア粒子を含む。内外面ともに丁寧なヘラ磨きが施されている。７・８は土師器である。７は古墳時代前期の甕の口縁部破片である。外面はハケ目が施されている。胎土に赤色スコリア粒子をわずかに含む。８は古墳時代後期鬼高式期の坏の底部から体部にかけての破片である。９は古墳時代後期の須恵器坏の口縁部破片である。10・11は土師質土器で中世段階に比定される。10は底部の破片である。11は底部から口縁部にかけて1/7ほど遺存する。12～15は15世紀後葉に比定される陶器である。12は常滑の鉢の口縁部破片である。13は瀬戸・美濃窯の鉄（錆）釉擂鉢の口縁部の一部である。14は瀬戸・美濃窯製品で、鉄釉の縁釉小皿の口





IIa灰褐色土　現耕作土
IIb　〃　II層に伴う畦畔
IIIa灰色土　近現代耕作土
IIIb　〃　III層に伴う畦畔
IIIc暗茶褐色土　IIIa層を水田の基盤層とする鋤込み痕
V　灰褐色砂質土　しまりあり
VIII　褐色シルト　中礫とローム粒を含む

IX　1号・2号流路（自然流路A）
1　暗褐色シルト　中礫を含む
1′　〃　中礫を含まない
2　灰白色粗粒砂　しまりなし
3　灰白色中礫砂
3′　赤褐色細礫砂
4　灰白色細粒砂
X　褐色砂
XI　鋤灰色砂

第4図　自然流路平面図（上）・土層断面図（下）
(1/200)　(1/60)

縁部破片である。15は瀬戸・美濃窯製品で、灰釉の縁釉小皿の口縁部破片である。16～19は近世陶器である。16は志野釉小皿の口縁部破片である。瀬戸・美濃窯製品で17世紀初頭に比定される。17は鉄釉香炉の底部破片である。外面の胴部下位に文様が施されている。18は鉄釉の灯明皿で1/3ほど遺存している。推定口径は9.4cmで、器高は1.9cmを測る。内外面ともにすすが付着し、内面は全面に釉薬がかけられていると思われるが、外面の釉薬は雑な仕上げとなっている。19は鉄釉擂鉢の胴部破片である。20は砥石の破片で4面の使用痕が認められる。長軸方向に直交するように幅1㎜ほどの刻線が外面を一周するものと思われるが、意図は不明である。

III　ま　と　め

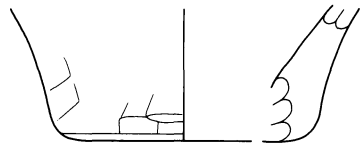
今回の調査区内では、遺物が検出され自然流路が確認できたものの、人為的な遺構は検出されなかった。以前調査した松川に接する2遺跡、永地遺跡と上泉遺跡（低地）の調査成果[1)]と比較をして、まとめとしたい。

遺跡内の層序は、永地遺跡に近い。しかし、永地遺跡では、表土から1.0m～1.5m掘り下げた段階で泥炭質の土層が表出するが、本遺跡では見られなかった。また、上泉遺跡（低地）で確認されたような河岸と崖面の地山も確認できなかった。遺物の出土状況は、永地遺跡のように大量に検出はされなかったが、時代ごとの割合は近似している。検出された遺物の時期や種類は、周辺遺跡と矛盾するものはなく、おおむね南側台地上の文脇遺跡や上泉遺跡（台地）と対応するものである。

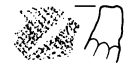
近年、沖積低地の調査例が増え、小櫃川流域の芝野遺跡に見られるように、水田跡のような生産域の様子が徐々にわかってきている。松川周辺地域では、台地上や低地の微高地上に多くの集落が存在したことはわかってきたが、これらの集落を営んできた人々の暮らしを支える生産基盤の跡が確認されていない。今後の調査において、水田跡等の生産域が検出されることを期待する。

注1　加藤正信　1991　『袖ケ浦町上泉遺跡・永地遺跡』　㈶千葉県文化財センター

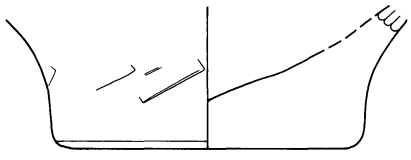
1 (1号流路)



2 (C4-04)

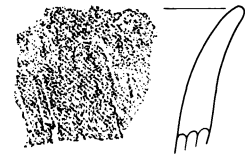


4 (C3-60)



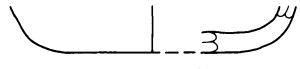
3 (2号流路)

5 (C3-54)



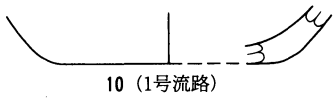
6 (2号流路)

7 (1号流路)

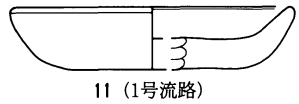


8 (1号流路)

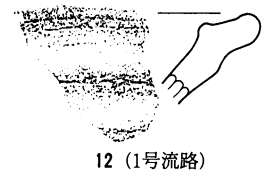
9 (8T)



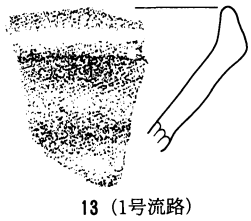
10 (1号流路)



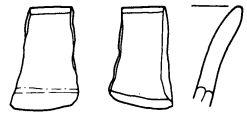
11 (1号流路)



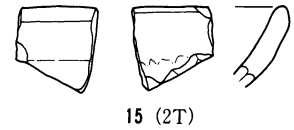
12 (1号流路)



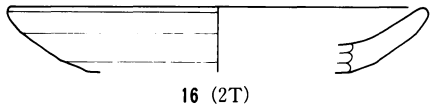
13 (1号流路)



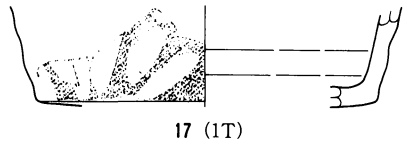
14 (B3-69)



15 (2T)

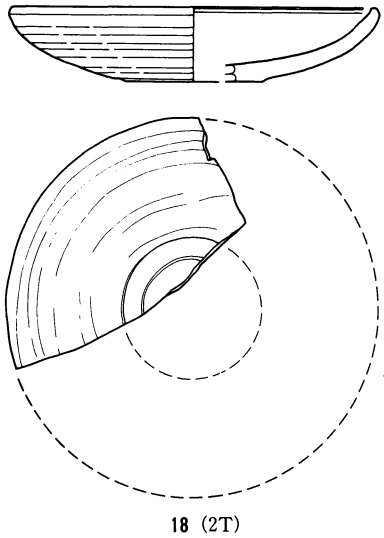


16 (2T)

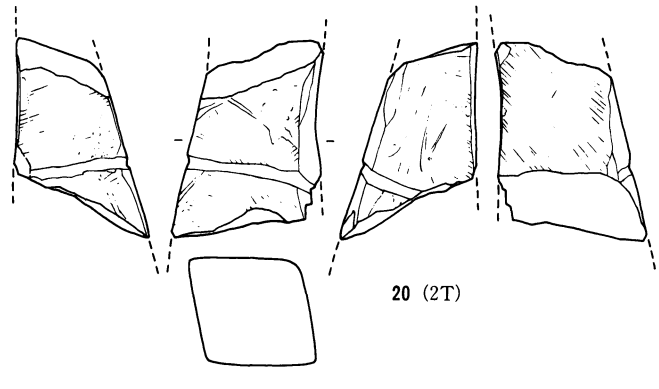


17 (1T)

19 (2T)



18 (2T)



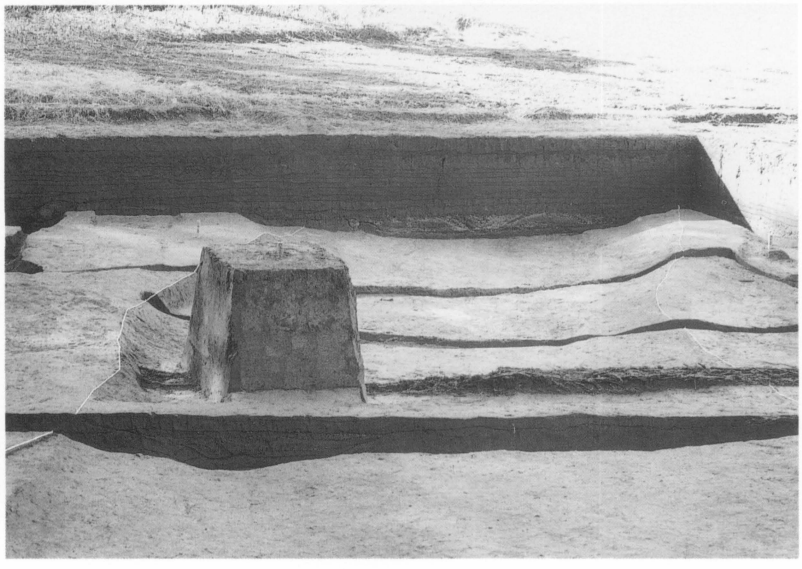
20 (2T)

第5図　出土遺物実測図

上泉遺跡と周辺の地形（1：10,000）

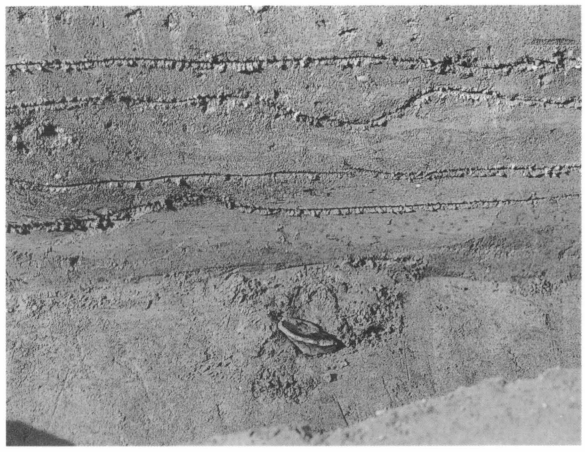
1．調査区全景

2．調査区西側遠景

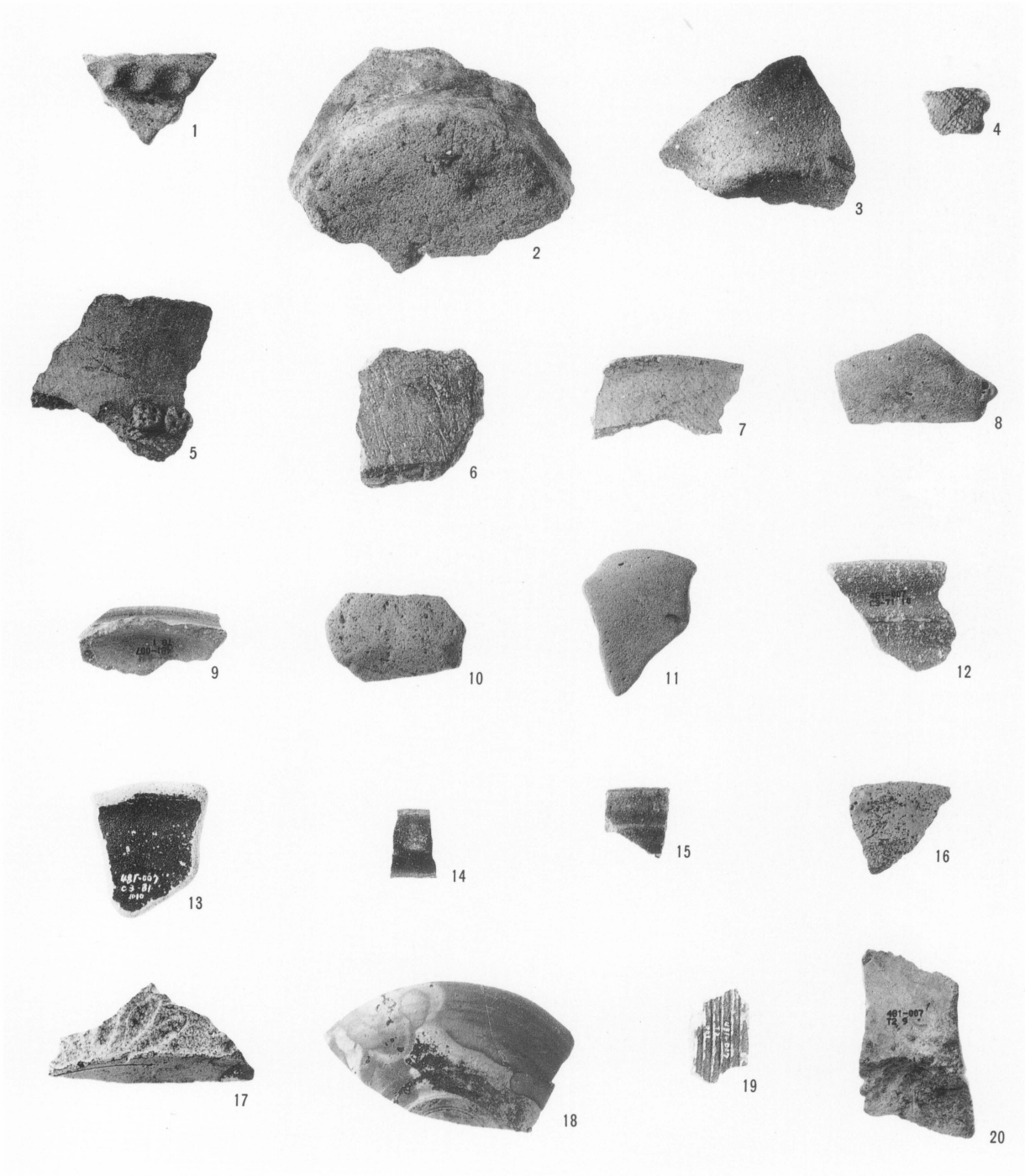


3．1号流路・2号流路

1．1号流路断面



2．遺物出土状況



3．出土遺物（1/2）

報告書抄録

ふりがな	そでがうらしかみいずみいせき
書名	袖ケ浦市上泉遺跡
副書名	二級河川松川広域一般河川改修事業埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第374集
編著者名	渡邉昭宏
編集機関	財団法人千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809-2　TEL.043-422-8811
発行年月日	西暦1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かみいずみ 上泉遺跡	ちばけんそでがうらし 千葉県袖ケ浦市 しもいずみ 下泉444ほか	12229	007	35度 24分 19秒	140度 02分 59秒	19990106 〜 19990129	3,900㎡	二級河川松川広域一般河川改修事業に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上泉遺跡	包蔵地	縄文時代		縄文土器（後期）	自然流路（松川の旧河道）を確認
		弥生時代		弥生土器（中・後期）	
		古墳時代		土師器、須恵器	
		奈良・平安時代		土師器	
		中世		土師質土器、陶器	
		近世以降		土師質土器、陶器、砥石	

千葉県文化財センター調査報告第374集

袖ケ浦市上泉遺跡

―― 二級河川松川広域一般河川改修事業埋蔵文化財調査報告書 ――

平成11年3月31日発行

編集　財団法人　千葉県文化財センター

発行　千葉県土木部
千葉市中央区市場町1-1

財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2

印刷　株式会社　正文社
千葉市中央区都町2-5-5